



# よいよい未来のために



## おばあさんのテーブル

あるところに、体の弱いおばあさんがいました。旦那さんが死んでしまい、後にはおばあさんただ一人が残されました。そこで、おばあさんは息子夫婦と孫娘と一緒に暮らすことになりました。

おばあさんの目は日に日に悪くなり、耳もどんどん遠くなっていきました。あまりに手が震えて、夕食のときに豆がスプーンから転がり落ちたり、スープがお皿からこぼれたりすることもありました。息子とその嫁は、おばあさんが食卓の上に食事をこぼすのを、とても嫌がりました。ある日、おばあさんがミルクのコップを倒してしまうと、もう我慢できなくなったのです。

二人は、部屋のすみにあるほうきをしまう戸棚の隣に、小さなテーブルを置きました。その日から、おばあさんはそこで食事をしなければならなくなりました。一人ぼっちでテーブルにつくと、おばあさんは目に涙をいっぱいためて部屋の向こう側にいる家族を眺めていました。息子たちは食事をしながら、ときどきおばあさんに声をかけましたが、その言葉のほとんどは、おわんやフォークを落としたことへの文句でした。

ある日、夕食前に床の上で孫娘が積み木遊びをしていました。父親が娘に何をつくっているのかとたずねると、孫娘は、「お父さんとお母さんのために小さなテーブルをつくっているの。」とにっこりとほほみました。「私が大きくなったとき、お父さんはこのテーブルを使って部屋のすみでご飯をたべるのよ。」

父親と母親は、しばらくの間、娘を見つめていましたが、突然声をあげて泣き出してしまいました。

その夜、二人はおばあさんを大きなテーブルに呼び戻しました。それ以来、おばあさんは家族のみんなと一緒に食事をするようになり、おばあさんが時折ものをこぼしても、息子も嫁もちっとも気にかけるなくなったということです。

【W.J.ベネット著『魔法の糸』の「おばあさんのテーブル」（グリム童話の「おじいさんと孫」を脚色）から引用】

この物語の中の、おばあさん、夫婦、孫は、「あなた」であり、「わたし」であると考えることができます。「あなた」と「わたし」が、どんな未来を創るのか、それは、全てこれからの「あなた」と「わたし」にかかっているのではないのでしょうか。



宇陀市人権啓発活動推進本部

